

末黒野

すぐろの

6月号 (通巻838号)



初蝶

小川 玉泉

(名譽主宰)

中庭へ初蝶ひかり撒いてをり

トンネルを抜けてなぞへの梅畑
瑞香へ運ぶ卒寿の杖の先
音のなき雨を受け止め黄水仙
中庭へ初蝶ひかり撒いてをり
児ら仰ぐ松と桜と金次郎
花園の春光を浴び握り飯

庭の木々の芽吹きが始まった。来客を送った後、廊下の硝子越しに、紅、緑、黄色と木によつて様々な、個性ゆたかな新芽の色合いを眺めていた。そこへ、紋白蝶が一羽柔らかな風に乗って迷いこんで来た。まるで春の来たことを告げているよう、視界から消えては、また戻つて来て、ひかりを撒いた。

若布干す

囀のひかりとなりて発つ岬
舞殿より婚の笙の音花馬酔木
春陰や海人ト口箱に花咲かせ
島うらら灯台型の駐在所

松本三千夫

月おぼろ水平線に島一つ
若布干す漁婦やことばの荒使ひ
赤い靴の少女に巨船来たり春
ひらひらと風を読みをり春の蝶
春の土へ下ろす稚齒の二本生え
春星の潤めど乏し安房の山
若布干す少年ギター垣へ立て
一行を一筆箋に春ともし

風光る

黒滝志麻子

(副主宰)

さざ波に千の花びらあづけやる
風あまし花咲く村の陶器展
町騒を風運びくる桜かな
ひとことの間合あまたの桜散る
窯出しの壺に耳ある山桜
桜貝力を抜きて引ける波
榛の木の瘤の黒ずみ春しぐれ
窓の灯や猫の行く手にある子猫
海へ向くベンチに二人風光る
山越えの段々畑花いちご
山門を出でて広がる茶摘かな
菜の花や貸自転車の二人乗

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

初音

森清信子

白樺に吊すランタン雪五寸
花ミモザ湿りの残る煉瓦道
目くばせに二の声を待つ初音かな
黄昏の堰の水音猫柳
細波のやうに日暮れぬ雛の間
雛の間に残る赤子の匂ひかな
紅梅や産着干さるる空の青
築山やぬくもりほのと落椿
湧水の噴く池青し雪柳
水草生ふ底まで透くる湧水池

一人静

安斎久英

多喜二忌や冷たき雨の夜をこめて
おひねりの色をこぼせり雛あられ
夕靄の尾根に広がり雨至る
万灯の形に吹かれてしだれ梅
競ひなく群れぬて一人静かな
喜捨受くる僧の手甲冑返る
雁帰る恙の友の文絶えて
早春の光を紡ぎ波がしら
春秋の心の襞に潜みけり
日照雨去り河津桜の紅映ゆる



野火

石黒興平

一枚になす一掬ひ紙漉女
着せ藁をこぼるる日差し寒牡丹
おひねりは稽古の褒美里神樂
参道の売子の声の春めけり
春疾風五彩の幕の揺れやまず
辛うじて読める子規句碑鱒東風
春祭稚児の金冠傾きて
猛りたる野火やにはかに里心
鞠高くあがるどよめき御所の春
通り抜け禁止の路地や春の泥

シヨパン

大橋伊佐子

平凡に卒寿を過ぎぬ花八手
日のあたるときも淋しき返り花
豆撒きや撒き手拾ひ手老い二人
春星やシヨパン洩れくる坂の町
春の雨シヨパンに溺るる刻もよし
ものの芽や日々新しき朝来る
夫のことおほかたは夢春の夜
客のなき骨董市の日永かな
野仏を埋め菜の花咲きにけり
雛飾る土蔵造りの喫茶店

伊予柑

田中臥石

酔の匂ふ碗の白魚躍り食ひ
金縷梅の道や上総の一の宮
海へ出て神輿暴るる春祭
春の日を持ち上げてゐる山武杉
伊予柑は波郷生地の一果かな
海を透く林炎の桃の花
牛飼の牛の匂ひや金盞花
春光の森や狸の居候
句会への出合ひ頭や四十雀
梅の香や河を遡行の潮頭

浅春

松田泰子

言ひにくきこと切り出すに春炬燵
置き薬手つかぬままに日脚伸ぶ
生きたとは残さること鳥雲に
粉蝶の羽ばたくに空広過ぎて
雪解川おのれ貫き向き変へず
風船の突かれて胸に戻りくる
青空へ赤子をかざす春祭
一気には抱き上がらぬ子山笑ふ
分葱つつみきし故郷の新聞紙
満開のさくらに雨の重さかな

啓
蟄

森
清
堯

金縷梅や園の詰所に鋸の音
切株の湿る年輪冴返る
秀を競ふ細枝の梅の万朶かな
はにかめる童女の項梅真白
浜小屋のテーブル長し蜆汁
行く水のひかりを宿し蘆の角
啓蟄や荷を積み替ふる宅配車
ためらはず天水へ落ち紅椿
鴨引くや群青もどる山上湖
河口よりほぐるる風や初燕



乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



春水 岡田史女

塔裏の出世観音冴返る
ものの芽や波立ちさわぐ池の面
白波を立つる帰帆や春北風
七輪のまだ使はれて梅の園
禅寺の朝の講話やあたたかし
春水の走り出したり実朝忌
白木蓮や風のかたさの霧笛橋

揚雲雀 吉田きみえ

北窓開く 岡野里子

連れ立ちて梅見る丘の夕茜
賑やかに孫ともどもの雛飾る
朝の日に雲なき空や揚雲雀
日和得し春禽の声にぎにぎし
老梅の楚そと曇天かがやかす
指折りて幼児と数ふ春の鴨
雲いくつ流れ日照雨の芽吹山

路の臺パラボラめきて日を集め
北窓を開き善隣近こうせる
橋ひとつ渡りぬ庵の梅三分
潮風や松葉押し上げ草青む
こそばゆき波音寄せぬ干若布
放生の鯉の背浮かび柳の芽
片言の一言増えぬ雛遊び

青炎集

松本三千夫選



宮城

千葉 惠美子

横浜

原 和三

芽柳や啄木の唄口ずさみ

芽柳や北上川のゆるやかに
墨痕もあざやか老舗の桜餅
桜餅香りほんのり木の皿に
彼岸とて桜餅二個仏前に
隣家のりんごの接木はよ終り

横浜

東小園美千代

雛の句碑なぞりて挿す立子の忌

古雛のかんばせほのか大藁屋
啓蟄や久方振りの土いちぢり
梅が香のなぞへの畑や遠き富士
木の芽風弁財天の旗白し
露のたう見つけ母子の笑まひかな

横浜

芝田 幸恵

末黒野や新しき朝明けそむる
味噌汁の冷むる早さの余寒かな
原つばの瑠璃の浮島犬ぶぐり
咲き誇る景の浮かぶや種袋
芽柳のなびく泉水さざれば波
差し潮の妙なる調べ春の波

春眠や四肢も五感もなきごとく

朧夜や語りかけくる埴輪の眼
鯉の口ひらきてとじて小米花
こつこつが好きで手仕事春障子
荒東風やモデルルームの旗倒す
燃え尽きし蠟燭匂ふ彼岸墓地

春潮に竜馬の声や桂浜

梅真白底なき空の天守閣

竹の秋四十川を舟ゆるり

春風の混み合ふ露天道後の湯

頻りなる鳥語の墓前彼岸入り

啓蟄や旅の企画を姉妹にて

横浜

荒井貞子

筆塚の日差しあまねし梅匂ふ
迷路めく鎌倉の路地梅香る

奉納の絵馬飛ばされぬ梅真白

青すぎる空紅梅の競ひをり

からたちの棘青あをと春めけり

蒼天やかうべを垂るる花あしび

横浜

橋場美篤

横浜

新谷フクエ

横浜

高木邦雄

梅の銘よき名ばかりや緋毛氈

梅園の一木に凝る句帳手に

漂へり梅の落花の二三片

芝焼くや素足にほはす聖母像

鬱の日も躁の日もあり葱坊主

百均に購うノート春うらら

江東

福田禎子

新宿

稲垣佳子

鳥帰る林泉の小鷺の動かざる

鴨引くや光に聡き水の皺

余生とはまだ先の事月朧

一山の芽吹き雨となりけり

段葛の通り初め待つ桜かな

青銅の鯉の大鷗尾春の雨

下萌えて瑞穂の国の目覚めかな

黒々と土輝きて落椿

一跨ぎ程のせせらぎ芹青む

片栗の花に沢風容赦なし

ありありと迷子の記憶月おぼろ

たんぼぼの花ままごとの卵焼

耕 土 集

黒滝志麻子選



母の播る香の蘇る蓬餅

三郷 中谷 未知

逆転のサムライシユート寒桜

川崎 品川 古市

心身の折り合ひ増すや青き踏む

胎動を秘めし大地や霞立つ

砂出しを急きて叶はぬ殻浅蜷

朧夜や暫し心を委ねたし

横浜 佐藤 喬風

紅椿ルビーの如き雫かな

横浜 高橋 正江

豆鉄砲食らひし鳩や鬼やらひ

裸婦像は垂氷の翼で飛ぶ構へ

間か猿の御符に治響酒供へけり

水温む花器の面より泡一つ

春望や波のまにまに烏帽子岩

赤子抱き春の大地へ一歩かな

本間せつ子

裏山に春の鼓動の畝二つ

高橋 泰子

春浅き川に見なれぬ鳥の群れ

朧夜の中に蹴りたる小石かな

三世代揃ひ初めしや雛飾り

春夕焼神が給ひし赤子かな

白椿一つ残して不死男の碑

菜畑や未来に大きく手を振る子

路地奥の昼を灯して雪柳
蛇穴を出て大空に雲ひとつ